



# 瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

キリストの聖体 B 年 (2024 年 6 月 2 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：出エジプト記 24 章 3—8 節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 9 章 11—15 節

福音朗読：マルコによる福音書 14 章 12—16、22—26 節

## イエスさまのパン

今日の福音朗読は、<sup>じゆなん</sup>受難の物語の始めにある<sup>すぎこしさい</sup>過越祭の食事の場面が読まれます。一節ずつ、ていねいに味わってみましょう。

本来、<sup>かいぼう</sup>過越祭の食事はエジプトからの解放を思い起こすものでしたが、イエスさまはさらに、死からの<sup>いこう</sup>のちへの<sup>くわ</sup>移行の意味を加えます。

12 節の言葉、「<sup>のぞ</sup>過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」は、ギリシア語原文から直訳してみると、「あなたが<sup>きょうちようてん</sup>過越の食事を食べるために、我々がどこへ行って用意することをあなたは望みますか」となるそうです。イエスさまの意志に<sup>きょうちようてん</sup>強調点をおいています。なぜなら、この時の<sup>ちが</sup>過越の食事は、いつもの食事とは<sup>も</sup>違った意味を持っていたからです。

13 節の「<sup>みやこ</sup>都へ行きなさい。すると、<sup>はこ</sup>水がめを運んでいる男に出会う。その人について行きなさい」というイエスさまの<sup>しじ</sup>指示も<sup>きようみぶか</sup>興味深いです。当時、水がめで運ぶのは女性の役目でした。男の人が水を運ぶときは<sup>かわぶくろ</sup>皮袋を用いるのが<sup>つうれい</sup>通例だったそうです。ですから、水がめを運ぶ男性は<sup>めだ</sup>目立ちました。

14 節も<sup>おもしろ</sup>面白いです。『先生が、「弟子たちと一緒に<sup>りっぽう</sup>過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』「先生」という呼び名は律法学者の<sup>そんしょう</sup>尊称である「ラビ」と同じです。ある学者は、「わたしの部屋はどこか」を、<sup>けらい</sup>家来のところに<sup>じゆんび</sup>宿の準備を命じていた王の<sup>と</sup>問いのようであるとしています。しかし、イエスさまが<sup>とつぜん</sup>あらかじめ場所を予約していたのではないでしょう。イエスさまの<sup>おう</sup>突然の要求に<sup>かか</sup>無条件に応じることが、弟子としてイエスさまに関わる<sup>かか</sup>きっかけになるという事実を伝え

ようとしているのだと思います（例えば1章16－20節、あるいは2章14節など参照）。

16節では「イエスが言われたとおりにだったので」とあります。イエスさまの予見<sup>よけん</sup>が適中<sup>てきちゆう</sup>し、弟子<sup>し</sup>たちはイエスさまが言われたとおりになっていたことを知ります。こうして、彼らは過越<sup>かえ</sup>の食事の準備をします。

22節の、「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈り<sup>と</sup>を唱えて、それを裂き<sup>き</sup>」は印象的です。なぜなら、食卓<sup>かんじや</sup>での感謝<sup>かんしゃ</sup>は、食事の始まりと終わりにする<sup>つね</sup>のが常<sup>つね</sup>だったからです。最後の晩餐<sup>ばんさん</sup>でのアクションは、日常<sup>じつじつ</sup>の食卓とは全く異<sup>こと</sup>なっています。

26節に「一同は賛美の歌をうたってから」とあります。過越祭<sup>かえまつり</sup>の食事では、食事を終えた後に、皆<sup>みな</sup>で詩編<sup>しへん</sup>を唱えたとされています。詩編の25－28編が選ばれたそうです。イエスさまのエルサレム<sup>えら</sup>入城<sup>にゅうじょう</sup>で人々が叫<sup>さけ</sup>んだ詩編と同じものを、弟子たちは歌ったのかもしれませんが（11章9節参照）。

### 【ちょっとひと言】

「至聖<sup>しせい</sup>なるキリストの聖体<sup>せいたい</sup>」というのが、今日のお祝い日の正式<sup>めいしじょう</sup>な名称となります。多くの小教区共同体では、この日に子どもたちの初聖体<sup>しゅせい</sup>を行います。初聖体には、ご聖体<sup>せいたい</sup>を受ける本人<sup>ほんじん</sup>が、「ホスチア」と「聖別<sup>せいべつ</sup>されたキリストの御<sup>おん</sup>からだ」とは同じ食べ物<sup>たべもの</sup>ですが、根本<sup>こんぽん</sup>的に違<sup>ちが</sup>うものなのだという信仰<sup>しんぎょう</sup>の真実<sup>まこと</sup>を理解<sup>りかい</sup>していることが求められます。「ホスチア」は小麦<sup>こむぎ</sup>によって作られたパンです。すなわち日ごと<sup>かて</sup>の糧<sup>かて</sup>です。しかし、ミサの中で「聖別<sup>せいべつ</sup>されたキリストの御<sup>おん</sup>からだ」は霊<sup>れい</sup>的なパン<sup>てき</sup>であり、いのちの糧<sup>かて</sup>です。この違<sup>ちが</sup>いを認め<sup>みと</sup>、受け入れ、ここから「聖別<sup>せいべつ</sup>されたキリストの御<sup>おん</sup>からだ」を切望<sup>せつぼう</sup>していることが初聖体<sup>しゅせい</sup>を受ける子どもたちに求められるのです。

聖体<sup>せいたい</sup>拝領<sup>はいりやう</sup>の時、「キリストのおんからだ」に、「アーメン」と答えます。ここには二重<sup>にじゆう</sup>の意味<sup>いみ</sup>があります。「はい、これは救<sup>すく</sup>い主<sup>しゅ</sup>イエス・キリストの御<sup>おん</sup>からだです。普通の食べ物<sup>たべもの</sup>ではありません」の意味<sup>いみ</sup>でのアーメン。そして、「はい、わたしはこのキリストの御<sup>おん</sup>からだをいただき、主<sup>しゅ</sup>イエス・キリストのように生きてまいります」の意味<sup>いみ</sup>でのアーメンです。前者<sup>ぜんしやう</sup>は信仰<sup>しんぎょう</sup>の真実<sup>まこと</sup>に同意<sup>どうい</sup>するアーメンであり、後者<sup>こうしやう</sup>は信仰<sup>しんぎょう</sup>を精<sup>せい</sup>一杯<sup>いっぱい</sup>生きていく決意<sup>けつい</sup>のアーメンなのです。

「アーメン」と答えて、ご聖体<sup>せいたい</sup>のイエスさまをいただき、キリスト者は神<sup>かみ</sup>のいのちを生きていくようになるのです。そのいのちとは知識<sup>ちしき</sup>や科学<sup>かがく</sup>だけでは把握<sup>はあく</sup>できない、神秘<sup>しんぴ</sup>そのものです。願<sup>ねが</sup>わくは、初聖体<sup>しゅせい</sup>の子どもたちが、いのちの神秘<sup>しんぴ</sup>を生きていけますように。

6月9日 9時半のミサ後、アントニオ会館の前でドンボスコ社の移動販売があります。